

若手の成長をサポートする若プロコーディネーターの役割 ～若プロ校内研修及び日常的な関わりを通して～

氏名 田中 天真

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

【概要】近年、学校現場では教員年齢構成の歪みが背景となり、教職員同士の関わりが減っており、ベテラン教員、中堅教員の経験や知識を若手教員に伝達していく研修を機能化させることが難しくなっている。このことから若手教員の成長を支援するために、校内における研修の必要性が増していると感じることができる。そこで本研究は、若プロ校内研修及び日常的な関わりを通して若手の成長をサポートするベテラン中堅教員の働きかけとして、特に若プロコーディネーターの役割を明らかにすることをねらいとした。若プロ校内研修及び日常的な関わりについて、若手の言葉や行動から見える姿とコーディネーターがどのように関わったのかの実践記録である。コーディネーターである筆者が傾聴を土台にした感情交流の過程で、若手教員との関係性の変化や筆者自身の振り返りでの気づきや思いを加え記述・分析した。若手自身が成長について語ったこと、そして相互に成長を感じたことが見えてきたと同時に、若プロコーディネーターは子どもの姿を中心に若手と聴き合うこと、若手同士をつなぐきっかけ作りをすること、若手の思いを大切にしながら時には共に考える立場、時には後ろから待つ立場を担う等、時と場や個に応じた役割が明らかになった。毎年構成メンバーが変わる学校組織の中で今後も、若手教員の成長をサポートする関わりを続けていきたい。

I 問題と目的

1. 研究の動機と問題の所在

(1) 若手育成の現状と課題

学習指導要領解説において次のようなことが指摘されている。①学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること、②学級担任の教師は、他の教職員と連携しながら学級経営を進めることが大切であり、開かれた学級経営の実現を目指すということだ。教職員が連携し、研修を進めることの重要性が述べられている。

また、若手の育成について中村(2017)は“学級担任制をとる小学校において、学級経営はすべての教育実践の核を成しており、若年期における学級経営実践は当該教員のその後の職能発達に重要な影響を及ぼす”と述べている。しかし、近年、学校現場では教員年齢構成の歪みが背景となり、教職員同士の関わりが減っており、ベテラン教員、中堅教員の経験や知識を若手教員に伝達していく研修を機能化させることが難しくなっている。

このことより、若手教員の成長を支援するために、

校内における学級経営研修の必要性が増していると感じることができる。

(2) 若手教員早期育成プログラム

石川県では「若手教員早期育成プログラム」が導入されて数年が経つ。目的は人材育成の充実と教育力の維持向上である。ベテラン教員の豊かな経験の継承を図ると共に、管理職やベテラン中堅教員が若手教員の困り感に寄り添い、若手教員が自らの成長を実感できるよう、丁寧にサポートしながら学校全体で育成していく体制を構築することが大切であるとされている。それぞれの学校の実情に応じて、組織のメンバー構成等を踏まえながら、柔軟に校内体制を整えて若プロ校内研修を進めていくことが期待されてきた。若手が自ら目指す姿を求めて、実践し、成長を実感できるようなベテラン中堅教員の働きかけ、特に若プロコーディネーターの役割が重要であると考える。

(3) 学級経営は見えない行為

末松(2016)は「学級経営は見えない行為」と述べている。学級経営はお互いに見えにくいものと考えられているが、この点について若手を中心に学級への思いをお互いを知ることで、それぞれの子どもへの

関わり方から何を学び、どんな気づきがあったかを共有することを通して、お互いの思いや、学級経営を見える行為にしていくことが必要なのではないかと考える。

若手が困り感をもっていても相談できない、自分で解決しようとする、学級がうまくいかないという現象が起こることは珍しくない。だがこの現象は個人に問題があるのではなく組織の問題であると末松(2016)は述べている。さらに末松、林(2016)は、教師が目指す良い学級の姿は、教師によって異なっており、教師にとって良い学級とは何かを一律に定めるのは難しい。そのため、身近な同僚や先輩などの他者の学級観に積極的にふれること、その中で自身の学級への関わり方や思いの問い直しを図っていくことが大切だと述べている。

お互いの関わりや思いが見えるように、そして若手が聞きたい、考えたいと自ら捉えることができる組織であることが今後より必要だと考える。

(4) 勤務校の現状と課題

筆者は小学校の学級担任として学級経営に悩んだ経験がある。悩んでいる時は自信が持てず、不安感や意欲の低下を感じていた。ただ、同僚と話し合うことを通して新たな気づきがあり、自身の児童への関わり方に自信をもつことができた感覚を今でも覚えている。

勤務校でのヒアリングからは、学級に対する思いや信念が多様であること、教師の児童への関わり方について話し合う場が少ないこと、関わり方について相互に知りたいと考えていることが見えてきた。また、教職員同士が理解を深めていくことの大切さも語られた。中でも「聞きたい・知りたいときに、お互いに話し合い学ぶ場が少ない」、「隣のクラスのことも見えるようではなかなか見えない」、「見て学んでいるけど難しいところもある」という若手の思いを知り、今ある勤務校の運営体制の中でよりよい若プロ校内研修を確立し若手をサポートすること、そのために若プロコーディネーターがどのような役割を果たすべきかを考えることが大切なのではないかと考えるに至った。

2. 本研究の目的

本研究では、傾聴を基盤とした若プロ校内研修

及び日常的な関わりを通して若手の成長変容のプロセスを記すとともに、若プロコーディネーターとしての筆者自身がどのように若手教員と関わり合ったかを具体的に記述・分析することで、若手の成長をサポートする若プロコーディネーターとしての役割を明らかにする。なお、本研究では、若手とは若プロ対象者とし、成長とは、よりよい子どもの姿を目指し、学級経営力や授業力の向上等、個々の課題を解決することとする。

II 研究の方法

研究主体が自らの実践活動をPDC Aサイクルで行い、その過程を記述・分析するアクションリサーチの方法を採用する。若プロ校内研修及び若手と筆者の日常的な関わり合いのエピソードを研究の中心に据え、その他インタビュー調査、研修での発話等を記録し、分析する。アクションリサーチでは研究主体の自己省察が重要なポイントになるため、自己省察についても記録していく。

<対象>

A教諭(教師9年目)、B教諭(教師3年目)、C講師(教師1年目)、D講師(教師1年目)の勤務校若プロ対象者4名。

*筆者は若プロコーディネーターであると同時に、B教諭とC講師が担任する学年の体育科授業担当であるため、B教諭とC講師とは、子どもの様子を中心に日常的に会話を交わす機会を設ける。

<期間>

2022年4月～2022年12月

III 実践経過

次の2点について、若手の言葉や行動から見える姿とコーディネーターがどのように関わっていったのかを時系列で記す。①若プロ校内研修における筆者と若手教員4名との関わり、②筆者と若手教員2名(B教諭、C講師)との日常的な関わり。

実践経過は、下表のように3期に分けて記述する。

第1期	4～6月
	若手の思いを聴くことを土台にした関わり
第2期	7～9月中旬
	若手と若手をつなぐ関わり
第3期	9月下旬～12月
	若手の気持ちや思いを引き出す関わり

これまで勤務校では、若プロ研修と他の研修が兼ねられることが多く、若プロ単独で行うことが少なかった現状があった。今年度は「若手の思いを聴く場の設定」、「授業者主体の相互授業交流」等を中心に、若プロ校内研修を改善していくこととした。相互授業交流とは、授業者の思い（児童の見取りや関わり方）を事前に聞き、授業ではその視点を中心に参観し、参観後お互いに考えたことを交流し学ぶ、授業者主体の研修である。

<実践報告に関わる若プロ校内研修年間予定>

4月	どんなことを1年で学んでいきたいか
5月	どんな学級を目指していくのか
6月	若プロ対象者個別面談①
7月	若プロ相互授業交流 通知表渡しにおける保護者対応
9月	学級づくり ～お互いを認め合うクラスとは？～
12月	若プロ対象者個別面談②

以下に記述する実践経過では、「下線部」は若手の発言等、「斜字」は若プロコーディネーターである筆者の思いや関わりを表す。

1. <第1期：若手の思いを聴くことを土台にした関わり>

(1) B教諭と筆者との関わり

5/9 若プロ校内研修 ～目指す姿の共有～

今回の若プロ校内研修は、筆者の大学院での学びから感じたことを同僚の先生に知ってもらうこと、そして同僚の先生、一人一人の学級、子どもたちへの思い、目指す姿を聴くこと、共有することが目的だった。この研修は全教職員対象にさせていただいた。全教職員としたのは、筆者自身、対象の枠を決めることに違和感を覚えたからである。当たり前にも疑わずに決めるのではなく、一度立ち止まって考えるという思考方法は筆者の大学院での学びの一つでもあった。よりよい子どもの姿を考えるというのはみんな同じだと思うし、子どもへの思いに差はないと感じたからである。

以下若手教員4名の目指す学級と研修後の振り返りである。

A 教諭	◇自ら行動する学級 ◇意欲的に学びに向かう子 ◇ポジティブに生きる子
------	------------------------------------------

B 教諭	◇友達や相手のことを思いやり、折り合いをつけられる学級 ◇様々な事に前向きに取り組める学級 ◇時計を見て行動ができるクラス
C 講師	◇自分だけでなく、まわりのことも考えて行動できる学級 ◇必要なことを考えて行動できる学級
D 講師	◇「できる」と自信を持って言える子 ◇家族以外にも安心信頼できる人がいる子

(A教諭) 今回の研修では、自身のこれまでの指導を振り返るよい機会となりました。また、他の先生方の意見が自分とは全く違っていたり、今まで考えていなかったことなどもあり、大変勉強になりました。さらに成長できればよいと考えています。

(B教諭) 先生方の考え方が知れる良い機会でした。そして、自分の子どもたちにどうなってほしいのか言葉で表す良い機会でした。普段、子どもに対してのアウトプットがすごく多いので、もっともっと先生方に聞いてインプットしていきたいと思いました。研修中は、どの先生方の考え方が自分のクラスに当てはまるのか、または取り入れられそうか、と考えながら参加していました。

(C講師) 他の先生方と比べて自分が持つ学級像が抽象的なことが多いと感じました。具体的な子どもの成長過程をイメージできるようになりたいと思いました。

(D講師) どんなときでも立ち止まって考えたり、様々な人と話をしたり、自分の考えを書き出してみることを行うと自分の考えをまとめることができるなと感じました。また、どんな子どもの姿を目指すかと改めて言われると言葉にするのは難しいなとも思いました。

若手の思いを目にし、筆者自身は聴いてみてよかったと感じたと同時に、それぞれの先生の熱い気持ちに触れることができ、嬉しい気持ちにもなった。この研修や一人一人の思いを今後の関わりに生かしていけたらと思う。また「目指す学級について考えたことあんまりなかったかもしれない」、「言語化したことがなかったから新鮮で良かった」と振り返る先生がいた。またあるベテランの先生の振り返りの中に「年々、子ども達に求めるものが変わってきているなと思います。(中略) 子ども達が変わってきたのか、

私の子どもを見る目が変わってきたのかはわかりませんが。」とあった。学級への思いや子どもへの関わりを考える意義に関する一つの大切なポイントなのではないかと感じた。お話を聞いてみたい。

5/18 日常的な関わり～感情交流から始まる～

2月の個別インタビューでB教諭は、「なかなか自分からは困っていても実は聞けない」「でも知りたい時に気軽に話せる場があったら」と話されていたことが印象に残っている。放課後、C講師とともにB教諭から運動会当日の徒競走スタートのことで「わからないのでスターターの方法をもう一度教えてほしい」と筆者に話があり、急遽運動場に出てOJTを開く。安全面、技術面などの確認ができた。どんなことであれ、教師の見通しがあれば、先生方に落ち着きが生まれ、また子どもたちも安心して臨めるものだ。このような若手教員との一つ一つの積み重ねを大切にしたい。B教諭から直接話があったことはこれまでほとんどないのでびっくりしたと同時に嬉しかった。B教諭の学年の体育を筆者が担当しているので、今後筆者からB教諭に働きかけ、日常的に子どもの話をしていく中で、お互いに感情交流ができればいいと感じた。

6/23 日常的な関わり～つなぎ役になる～

放課後、筆者からB教諭の学級の児童の体育での頑張りを伝える話から、C講師の学級のことも話をする。B教諭は「なんかC先生のどうしようかなって困っている感じがひしひし伝わってきます」と。C講師の学級のクラスを昨年度担任していたB教諭は「あの子は学習面では」といろいろ筆者に話してくれた。B教諭はなかなか自分から積極的に話すタイプではないと自分でも言っているが、C講師、C講師の学級の児童のことを話すB教諭の姿は頼もしく見えた。B教諭には「C先生の授業も今度参観するし、またいろいろ聞いてあげてほしいわ、みんなで考えていかんかね。」と伝える。「はい」と笑顔のB教諭。B教諭とC講師がお互いに話をするためのつなぎ役に筆者がなれたらいいと感じた。筆者から若手教員に関わることで、当然なことかもしれないがお互いにどう感じているのか、学級のことをどう見ているのかなど見えにくい部分も少しずつであるが交流を通して見えるようになっていくのではないかと考えた。

6/27 日常的な関わり～子どもの姿を共有～

体育の水泳の授業は複数体制ということで週3のうち2回は担任のB教諭が来てくれることに。お互いにとって良い機会だと考える。児童の姿を一緒に見ながら、筆者の指導する姿を見てもらえるし、今後もお互いに子どもの生の姿で話をするができる。複数でみることで、確かに空き時間がなくなるわけだが、せっかく2人で見るということをプラスに捉えて、児童の頑張る姿をB教諭と共有できたらと思っている。放課後、男児2人が筆者に対して「先生できたよ」と笑顔で伝える話をし、B教諭も「かわいいんですよ、本当に」「にくめないですよ」と笑顔。筆者は、これからも児童のことをタイムリーにどんどんほめてあげたいと伝える。子どもの姿を中心に据えながら、お互いの話の積み重ねを大切にしてい

6/29 若プロ校内研修～B教諭の思い～

個別面談の日。B教諭は次のように語った。「4月5月はある男子の関わりで悩むことがあった、授業でもどンドン話すので結局その子中心で授業が進み、他の子が不満をもったり、授業への参加が少なかったりしていた。6月の要請訪問を受けていろいろ指導してもらいながら学習規律のこと、全員参加の雰囲気づくりなどを意識して少しずつよくなっている。今は、みんなが前向きに、友達の悪口を言うのではなく、みんなで認め合うクラスになってほしい。」ということである。(このことは2月のインタビューでもでてきた。)昨年度も、B教諭は子どもたちにこうなってほしい！自分は認め合いを大切にしたいと思っていると話してくれたことを思い出し、「2月にも同じように話してくれたね。大事にしていることなのかな？」と尋ねると「自分は嫌なんです、人の悪口言うのとか。」とB教諭。B教諭の普段の様子と違い、強い気持ちが筆者に伝わり、つい「いいねえ、その感じ、大切やよ！」と伝える。B教諭の児童への関わりや思いを他の若手教員にも伝えてほしいなと思う。若プロコーディネーターとして、感情交流を通して、若手が以前の自分と繋げたり、振り返ったりする場を設けることも大切なのではないかと考えた日になった。若手教員の成長のひとつのきっかけになれば。

(2) C講師と筆者との関わり

4/4 日常的な関わり ～じっくり待つ姿勢～

C講師、D講師の2人は、本当にまっすぐで、見ていて気持ちがいいという印象。だけど今何をすべきかの見通しがもてないと思う。「遠慮なく聞いていいし、忙しそうに見えてもどんどんわからなかったら言ってね!」と伝えている。今日も目が合うと「先生、ちょっといいですか」と聞いてくれる。「一緒に考えることができるし、自分も気づいていないことかもしれないからありがたいよ!一緒にやらんか。」と返した。こちらからどんどん声をかけることもできるが、今はそれぞれの先生の思いや考えもあるし、たくさん言われても頭は混乱するだろうし、整理もできないだろうから、基本じっくり待つイメージでいようと思う。一緒にできることは当然声をかけることに。

4/18 日常的な関わり ～指導方法の共有～

コロナ対策の徹底について朝礼で校長から話がある。体育担当は、筆者とC講師の2人だけなので、放課後改めて全学年を通して共通して意識するポイントについて話す。①素早い整列、集合、よく見てよく聞くことが安全に運動するポイントであることを4月の体育で子どもと意識、行動していくこと、②そしてフィジカルディスタンス、手洗い、換気の徹底をしていくこと、③最後になわとびを体育のウォーミングアップで取り入れていくことを自分が作った掲示をもとにC講師と話す。安全、感染予防が大切な内容だったのでこの話し合いは自分の一方的なものだったが、大切なことなので伝えた。話の後、テストのことや子どものことの質問がC講師からあった。どんどん聞いてくるC講師が頼もしい。聞ける雰囲気をも自分も作ってあげたい。C講師がアウトプットするきっかけを若プロコーディネーターとして自分が作ってきたい。

5/7 日常的な関わり ～お互いの思いを知る～

放課後、C講師とお互いの学級の話に。C講師の言葉が印象的。「怒るより、褒める方が子どもたちよく動くなつて分かってきました。」と。私もその言葉に対して「子どもの様子をどれだけ見ているかやね。C先生、すごいよ。そんな風に感じられるの。子どもたちもC先生、こんなところで褒めてくれる、こんなところで叱ってくれるってわかってくるはずだよ。自

分は、とにかく子どもたちのマイナスな言動、よくない言動があっても、子どものせいにしないで、どうしたらいいのかを見取って、伝えて一緒に考えたいって思うようにしとるよ。子どものことで悩むこともいろいろあるけど、最終的には子どもたちの言動もプラスにとらえて考えたいって思っとるわ。」と長々とそのような内容を話した。ついしゃべりすぎたかもしれない。C講師は一生懸命聞いてくれていたなあとありがたく感じた。学級のことをお互いに語ることで、子どものことだけでなく、C講師のことを知ることができたのではと感じた。こんな時間も大切にしたい。C講師が自分自身を振り返る機会になればいい。

5/9 若プロ校内研修 ～C講師への関わり方～

目指す学級の姿を聴き合った研修でのC講師の振り返りでは、他の先生方と比べて自分が持つ学級像が抽象的なことが多いと感じました。具体的な子どもの成長過程をイメージできるようになりたいと思いました。この言葉から、C講師自身が前向きに捉えようとしていると同時に、自分の現在の姿を客観的に見ようとしている様子が伺える。D講師もそうだが、目指す姿をいざ言われてもイメージできないものであろう。だとしたらどうコーディネーターとして関わっていけばいいのか、筆者も考えていかなければと感じる日だった。

5/19 日常的な関わり～若手の言動を認める～

運動会練習に補欠としてC講師の学級に関わる。C講師が子どもに対してメリハリをもって指導し、認める言葉かけを繰り返されていた。授業後、C講師に「指導の後に、認める言葉があってよかったね、子どもたちができないのは見通しが持てないとか、動きが難しいとか、単に集中してないという理由じゃない時がある、だからC先生が何度も繰り返しモデルを示したことで子どもたちも理解できたんじゃないかな」と伝えることができた。C先生の子どもへの関わりを認めたり、価値づけたりすることをお互いに授業を見合う中で日常的にできたらいいと感じた。C講師の一生懸命な姿が嬉しい。

5/25 日常的な関わり ～若手と共に考える～

体育の陸上領域のリレーについてC講師から質問がある。安全面、技能面などを伝える。放課後、C講

師から「もう、お互いに熱くなって言いあう感じになって」とふり返る言葉があった。すぐに体育館に行きホワイトボード上で一緒にふり返ることに。ルールは伝わっていたけど、めあてが明確でなかったことが明らかに。勝敗に目がいってしまったので、バトンパスの技能やみんなで取り組む態度面のめあてにすることでめあてが焦点化されたかもしれないと話をする。また子どもたちの実態からもお互いに仲良く運動するという点が体育の授業でも中心にしていくべきなのではと2人で話をする。運動が終わった時の子どもたちの言葉に着目するといよいよ話をする。「またやってみます」とC講師。C講師の真摯な態度に、気持ちがほっこりする。3年生の子どもたちの姿と同時に、C講師の姿も自分は言葉にして伝えたいと思う。

日々の業務、教材研究、子どもとの関わり、いろんなことが目の前にある。筆者ができることは「聴くこと」「一緒に教材研究し、考えること」「これっ！っではっきり伝えること」を意識したらよいのかもC講師と話をさせてもらいながら感じる。

5/30 日常的な関わり ～放課後の5分で～

体育担当は3、4年がC講師、1、2、5、6年が筆者となる。系統性をもった指導についてともに教材研究をすることになった。C講師からベースボール型単元の質問。指導要領を一緒に確認し、学習活動を決める。お互いに授業後、放課後に子どもの姿を出し合って次の手立てを考えるという流れになった。自分もアウトプットすることで学びがあるし、C講師の思いや関わりを知ることにもつながる。放課後の5分！と決めて話をした。視点は「楽しく運動するために」C講師の真摯な態度に、気持ちがほっこりする。3年生の子どもたちの姿と同時にC講師の子どもへの関わりも言葉にして伝えたいと思う。

6/20 日常的な関わり～気持ちを受け止める～

放課後、校長室から出てくるC講師。なんとなく元気がなさそうに見えただけだと思うが。更衣室に行く姿があったので自分も着替えに向かう。更衣室で2人、プールの指導やプライベートの話があり、こちらから「どう？さっき校長先生と話してたみたいし」と聞いてみると、「実はちょっと子どもたちが落ち着かなくて、校長先生と話してました。」その後もC講師の話は続く。具体的には「自分に対してと他の先生

に対しての子どもとの態度が違う、自分の時はあれやこれやと言う。」との内容。「それぞれの先生と子どもとの関係もある、C先生には子どもも甘えている部分もあるかもね。でも先生方みんな子どもを見ていくからね、また話そう」と返す。今後個別面談、若プロ校内研での相互参観などがある。C講師にいろいろな方法を伝えることより、できるだけサポートの形、何かあったらいつでも聞ける体制、雰囲気作りをもっていったらいいのか。C講師の気持ちをどうコーディネーターとして受け止め、働きかけていくかである。

(3)第1期のまとめ

コーディネーターとしても同僚としても「聴くこと」を大切にしようとした期間であった。若手教員は4名であるが、話をする時はグループであっても相手との1対1の姿勢で向き合うことを心がけた。子どもの様子を中心に話し合う中で、若手教員の学級への思いを知ることができた5月、6月の若プロ校内研修であった。特に、目指す学級についてそれぞれが考えた5月の研修はポイントだったと筆者は考える。B教諭の「自分は子どもに対してのアウトプットがすごく多いので、もっともっと先生方に聞いてインプットしていきたいと思う。」という振り返りから、お互いに関わることがB教諭の成長につながるのではと考える。またC講師の「具体的な子どもの成長過程をイメージできるようになりたい」という思いにもコーディネーターとしてどう関わればよいのかを考えていきたいと思うことができた。お互いを知ること、聴くことを目的にした研修が核になり、日常的に行われる些細な会話に繋がっていく感覚があった。

また4名の若手教員の子どもに対する関わりや思いを聞いていくうちに一人一人に頼もしさを感じると同時に、筆者自身、コーディネーターとして何ができるのかを考え、実践し始めた。子どもの頑張る姿をタイムリーに伝えること、そして若手教員の子どもへの関わりを素敵な点を認め、価値づけることが中心となった。

またある時は、先輩として若手に伝えなくてはいけないという時もあった。そんな時は、若手教員に対して一方的に言ってどうだろうとか、聞き役にならなきゃとか考える余裕はないし又必要もないと考える。筆者自身も葛藤があるが、思いを率直に伝える時

こそ、自分の教育観がストレートに表現されているのだと思う。こちらも教育観を語るからこそ、相手も受け止めてくれるのではと感じる。その点も筆者自身、心に留めながら若手と関わるようにした。だからこそ、まずは聴くこと、お互いに知ることがスタートなのではないかと思う。

また若手教員としての経験の差に応じて柔軟に、コーディネーターとして聴く、待つ姿勢を意識したり、こちらから働きかけたりすることも必要なのではないかを感じるようになった。そして、**若手が安心してアウトプットできる雰囲気づくり**にも努めてみようという前向きに捉えられる筆者がいた。こう思えるのも何か同僚として一緒に考えていけないか、考えてみたいと筆者を思わせてくれる若手教員の熱い思い、誠実さのおかげなのではないか。**一人一人との感情交流**ができる環境の有難さを感じた第1期であった。

2. <第2期：若手と若手をつなぐ関わり>

(1) B教諭と筆者との関わり

7/12 日常的な関わり～若手に思いを伝える～

B教諭と放課後の何気ない話から。子どもと一緒に遊ぶ、話すことが子ども理解の一つだと筆者は思っているので、B教諭やC講師、D講師など若手教員には「それぞれの先生の考えがあると思うし、体の無理はできないけど、一緒に体を動かしたり、笑いあったりする時間が一日の中であればいい」と常々伝えている。いろんなことが毎日あり、忙しい中では難しいことかもしれないが忘れてはいけない点だと振り返る。3月に転出されたベテランの先生が「もっと若手は子どもと一緒に動いてほしい！遊んでほしい！」と言っていたのを思い出すし、自分はそのことを若手に伝えていけたらと思っている。時には自分の大切にしている思いを伝えることも必要なのだろう。

7/19 若プロ校内研修 ～B教諭からの質問～

通知表渡しに関する保護者対応の若プロ校内研修。どんな流れで筆者が通知表渡しをしているか、席は？内容は？いつ話をきるか？事前準備は？などについて教室で筆者が先生役をしながら進めた。C講師は「とにかく聞きます」とメモを取り始める。B教諭からは「通知表渡しの日に、子どもたちに何か話しますか？」と質問がある。いい質問だなと思った。自

分は「もちろん、子どもたちには1学期の頑張りを伝え、お家の方には勉強・生活・友達で頑張ったこと、具体的に伝えるよ！2学期にもっと成長できるように頑張ってもらいたいことも伝えるよ！そして子どもたちにはお家の方にどんなことを先生と話したのか聞いてみてね！」と言うようにしている。」と。B教諭は「そうなんです、やっぱり、言いますね」と。これまででは言っていなかったようだがどうしようか迷っていたようだ。B先生が質問してくれたおかげでC講師も学べたのではないだろうか。B教諭も「実はあんまり聞いたことない」と言っていた。どんなことも知っているはず、アタリマエと先輩が思いこまないように。一緒に考えたり行動したりすることの大切さを痛感する。B教諭からの質問に頼もしさを感じる。どんなことでも話ができるように、日常的な交流が基盤となっているのだと感じる。

7/20 日常的な関わり ～生かされた研修～

通知表渡し後、B教諭が筆者のところに来てくれて「昨日先生に教わった、具体的な姿で伝えることを心がけたら、保護者の方から良い話きました！って言ってもらいました。ありがとうございます」と話してくれる。B教諭から今日はやり切った感じを受けた。B教諭のその様子が嬉しい。「聞きたい」「知りたい」という前日の若プロが今日に生かされたのだとも思う。上手くできたという若手教員の言葉がコーディネーターにとっても嬉しいし、やりがいにも繋がる。

8/31 日常的な関わり～若手相互の繋がりを～

新学期を前に、B教諭の教室には、2学期のいろいろな行事の階段を昇る楽しい板書にキャラクターが描かれていた。C講師の教室を覗くと同じような感じで書かれていた。どうやら相談したわけではないらしい。おそらくC講師が2年生のB教諭の技を取り入れたのだと思われる。教室にいたB教諭に「気合入ったドラえもんやん！いいね」と伝えると笑顔が返ってくる。続けて「隣のC先生もB先生の見て書いた感じじゃない？さすがB先生、モデルになってくれてありがとう！C先生の黒板もいい感じじゃない？」と伝えた。B先生は「そうですか、やったあ！」と嬉しそうだった。若手の中でもお互いに学び伝え合えることがある。B教諭もC講師の参考になったことがうれしかったのかもしれない。そんな相互の

つながりを筆者が伝えたり、認めたりできたらいいと感じた時間だった。

9/20 日常的な関わり～後方からのサポート～

10月初旬に筆者がB教諭の学級の体育の要請訪問、10月中旬にB教諭が算数の要請訪問全体研を行うことになり、そのことについてB教諭と話し合う。子どもたちの姿を中心にお互いに話し合う絶好の機会だと感じながら、指導内容や指導方法、そしてその背後にある自分たちの思いについて話し合い確認し合った。お互いそれぞれのアプローチで授業を行うことになるが、それぞれの授業で子ども達がどうだったかは共有してみたい。教師の思いとかかわりの核になる部分だから。B教諭の前向きな姿勢に対して、ゆっくり、じっくり後方から、同じスタートラインで考えるイメージで関わっていきたい。

9/22 日常的な関わり～何でも聞ける雰囲気～

B教諭に協力してもらいながら体育の授業でのタブレット振り返りや作戦ボード作りのために、朝の会、帰りの会の一部の時間をもらった。教室ではB教諭もいるので、子どもと自分との関わりもみてもらえる。B先生から体育のチーム決めについて質問がある。「先生、あのチームはどうやって決められたんですか？やっぱりいろいろ考えてらっしゃるんですか？」と。「そうだよ。事前のアンケートや体育の様子で、実態を加味して決めたよ。もちろん、どんなメンバーであっても仲良く運動できればいいけど。今回は単元のゴールのみんながシュートできるゲームというのがあったから、そのために考えてみたチーム」。「やっぱりそうなんですね、先生の分け方を参考に席替えしてみてもいいですか。自分もいろいろ考えてみるんですけど、10月に要請訪問あるし、ちょっと参考にします。」B教諭がいつでも尋ねることができるよう、知りたい、考えたいが出るように自分もオープンでいたい。そして、B教諭のやる気を感じられることが私にとっても嬉しい。

(2) C講師と筆者、若手教員との関わり

7/6 若プロ校内研修 ～子どもの姿で語る～

筆者の学級の相互参観を行った。「○○さんも、◎◎さんもすごく頑張っていましたね。」とC講師から言葉をもらう。筆者が相互参観で見てほしいと伝えていた2人のことについてフィードバックしてくれ

た。C講師が子どもの姿を真似ながら子どもの様子を話してくれたことが嬉しいし、すごいなと感じる。子どもの姿を置きざりにして授業の方法を問うてもあまり意味がない。子どもの姿がそうあるのはどんな手立てがあって、どんな関わりがあるのかを話し合うことが大切だと思う。だからこそ、まず子どもの様子を話してくれたC講師の言葉にうれしさを感じた。

7/13 若プロ校内研修～C講師の困り感から～

C講師の相互参観の整理会を行った。A教諭、B教諭が「この子が～」「ここははっきりと～」とアドバイスする。その二人の姿が心強い。C講師が「先生に対する言葉や友達同士の関わり」に困っていることを核に話が進む。A教諭は「授業力しかない」と語り、B教諭は「人間関係を含め意図的に指名する」という話をする。筆者は「授業の中での生徒指導」について話をした。それぞれの思いが語られたが、C講師中心のものであったかは反省すべきかもしれない。どうしても課題改善に行き、C講師の困り感から離れてそれぞれの先生の思いが語られたという気もする。だが若手同士が同じ授業について語り合う場があることはよいことだ。最後にC講師からは「今日のように先生たちがいないときはえー？なんで？って言ったり、一緒に遊ぼうとしても子どもに避けられたりすることがある」と話してくれた。自分のそういう部分を話ができるC講師って素敵だなと思う一方で、何とかこれからみんなで見ていこうという気持ちになる。C講師の困り感が見えていなかったことが分かり、反省する。A教諭が「授業だけでは見えにくいですね。日頃から見に行かなければいけないですね。」と言ってくれる。授業だけでなく、日常的にC講師とその学級の子どもを見ていこうというA教諭の言葉が嬉しかった。

8/29, 30 校内研修 ～若手同士の関わり～

9月、10月の要請訪問に向けての指導案検討会を校内研修として2日続けて行った。9月の要請訪問の一本はC講師の社会で、A教諭と筆者の3人の検討会グループだった。C講師はうまく単元デザインできずにいたようで、検討会では以下のような話し合いになった。A教諭が「どんなことも子どもの気持ちになってみる。子どもがおもしろい！やりたいて思えるのか！っていう視点で考える。子ども

になりきるってこと。」と語る。見取りの部分、子どもの実態、子どもとの関係にも関わる視点での話だった。C講師に向けてしっかりと思いを伝えるA教諭の姿が頼もしかった。よい検討会の雰囲気だったが、時間切れで終わる。職員室でA先生が「C先生、大丈夫ですかね？」と筆者に話し掛けて来る。その言葉に甘えて筆者も「よければまた3人で検討会せん？いい？」と。A教諭「いいですよ。」と応えてくれる。この日の午後、そして次の日も少し時間をとって3人で教材研究を行った。夏休みだからこそできる。この流れを学期中でも続けられたら、と思う。A教諭がC講師に向けて語り掛ける。「講師の時期に、これだけ教材に向き合うことができたらすごいよ、財産になるよ」と、筆者も「楽しくなってきたよ？いいよ、おもしろい単元や！一緒に考えていこう」と伝える。2日目の校内研修は10月要請訪問、筆者の体育についての検討会だった。体育の見方考え方を含め、皆で検討した。C講師が「体育って難しいですね」と言う。それを受けて筆者は応えた。「研究授業はじっくり教材研究して、そこまでをゴールとしていろいろチャレンジする。ぐっと力を入れることが他の教科にもつながるからね！でもね、普段は、とにかく汗をかいて運動する、楽しく運動する！これだけ！を考えてるよ」と伝えるとC講師は笑顔で応えた。

9/20 若プロ校内研修 ～A教諭の働きかけ～

C講師の要請訪問が来週に迫った。夏休みに3人で教材研究した社会についての要請訪問である。A教諭が「C先生、どうですかね。教育事務所に指導案提出明後日ですけど？声かけます？」と筆者に話し掛けて来た。A教諭の言葉が嬉しい一方で、夏休みに3人でしたし、9月に入っても社会の授業の様子を聞いていたので、ここまで来たらあとはC講師のしたいように！何か聞きたいことがあればという感じだった。A教諭の言葉が嬉しい一方で、あくまでC講師の気持ち優先でということ申し合わせた上で、筆者からC講師に尋ねた。C講師の思いとしては「少し指導案をみてほしい」とのことだったので午前30分を使って形式や本時の内容について話し合った。短い時間だったが訂正すべき箇所もかなりあり、C講師からもいくつか質問があった。A教諭から「本時も大丈夫かな？見ますか。今日しかないし。どんなもんですか？」と筆者に尋ねてきた。「もし本人が必

要ならしよう。聞いてみるわ。」と答えてC講師に尋ねた。無下に断れないということも正直あるだろうが、「お願いします」との返事だった。臨時休業の今しかできないことだと思い定め、定時までの45分で本時の模擬授業をする。A教諭から「ここどうする？」とC講師に授業の流れを確認してくれていたことが有難かった。C講師も「よかったです。ありがとうございます」と笑顔で応えてくれた。A教諭が「こんなんでもよかったですかね？言い過ぎたかな。(笑)大丈夫かな」と言うので、「ありがとう。C先生も聞きたいことあったみたいし、よかったよ。もし、本時の情報収集難しそうなら一緒にスーパーついていってあげようか、うちらで(笑)」と笑いながら2人で話を終えることができた。C講師に関わり一緒に考えようとする姿勢に感謝の念が湧いた。

9/24 日常的な関わり ～C講師のサポート～

休日、職員室にて。たまたまA教諭と会う。お互いにC講師の火曜日(27日)の要請訪問の話に。A教諭は「C先生、いろんなこと言われて混乱してますよね、言いすぎかなとも思ってますけど(笑)」、「ここまで来たらC先生が心配なところは聞いて、後は授業者任せよう、一応明日月曜(26日)は授業の流れだけ、3人で確認しようね！」と伝える。

(3) 第2期のまとめ

若手教員には第1期に続き、子どもの頑張る姿を中心に話をすることを心がけた。若手教員からいろいろ聴かれることにコーディネーター自身嬉しさを感じると共に、若手教員の成長を実感できた期間であった。若プロ校内研修では、若プロ研修がきっかけで若手同士がつながる場面が何度か見られた。若手同士が関わる場というのは自然発生的に日々起っているであろうが、若プロ研修やコーディネーターを介した話し合いによってその機会が増えてきたように思う。相互参観では、それぞれの若手教員の思いを聴くということが目的であることを確認して研修をした。C講師の相互参観では、参観では見えなかったC講師の困り感のアウトプットがあった。C講師が若手の話し合いの中で率直に困っていると伝えてくれたのは、日々A教諭、B教諭、D講師と共にお互い関わり合っていたからであろう。またC講師の言葉に対してA教諭が、次のステップへの方策を提案してくれたこと、みんなで見ていこうという雰囲気を

作ってくれたことにコーディネーターとして感謝している。お互いが思いを出せるこのような場に出会い、改めて聴くことの大切さを実感することができた。また、若手教員が話しやすい環境を作るために日常的にそして意図的に、コーディネーターである筆者が子どもの話をして働きかけることの意義を確認することができた。

授業だけでは見えない学級の様子、先生の思いを交流した相互参観がきっかけとなり、8月、9月の指導案検討会、要請訪問へとC講師をサポートするような声かけや一緒に考えようとする行動へと繋がっていったと考えられる。教師9年目のA教諭が今回のように若プロの中で中心的に自ら声をあげてくれたことによって他の3名の若手教員も安心して話すことができたのだと思う。

第2期には、校長や教頭、同僚の先生との話し合いからもコーディネーターの役割を考えるきっかけをたくさん頂くことができた。若手教員や若手教員の学級の子どもたちが頑張る姿について校長、教頭や同僚と今年は本当に多く話をさせて頂いた。筆者自身も、コーディネーターという役割を任せてもらい、若手教員だけでなく、管理職や教務、同僚の先生に自ら子どものことを話しにいきこうと今年度は意識していた。特に校長からは、「教師の先輩として、若プロのコーディネーターとして学級経営を含む授業について若手教員に伝えてほしい。」「なかなか見えにくい若手教員の困り感を聴いてほしい。」ということは何度か、コーディネーターの私に話して下さった。筆者自身、その言葉をいただいて自分が学校の中で任されている立場にやりがいを感じる事ができたし、自分も一人の教師として研修を重ねて、少しでも若手にとってのモデルになれるようにと前向きに捉えることができた。コーディネーターの役割とは何であるかを見つめ直し、また学校の教育活動全般において、筆者自身が学校のために何ができるのかを整理するきっかけを与えていただいた期間でもあった。

3. <第3期：若手の気持ちや思いを引き出す関わり>

(1) B教諭と筆者、若手教員との関わり

9/28 若プロ校内研修 ～やる気のスイッチ～

C講師が知りたかった、考えたかったテーマ「学級づくり」に関する校内研修を行った。C講師にとって

の課題とは「認め合うクラスにしたい！そのためにはどうすればいいのか」ということが夏休みの個別面談で明らかになった事柄だった。今日はB教諭、D講師と私を含めて4人で認め合うクラスになるためにどんな手立てがあるか(授業&授業以外)を付箋にそれぞれ書き出し、子どもの実態を交えながら整理した。熱心にメモするC講師、自分と子どもとのことをたくさん話してくれるD講師、そしてB教諭が自分の考えをアウトプットするだけでなく、C講師やD講師に「私もD先生みたいに実は～」「本当にそうだよ」と返す頼もしい姿があった。筆者が話さずとも、B教諭と2人がお互いに話せる空気感がいいなと感じた。C講師とD講師とB教諭が子どものことで若プロ後に話す姿があり、若手同士が話すきっかけづくりも自分の役目なのかなと感じた。若手の先生が子どものことで前向きに話すこの雰囲気や大事にしていきたい。この日の研修についてB教諭の振り返りからは「積極的に自己有用感を感じられる手立てをうっていきたい」と書かれてあった。若プロの場が、先生方のやる気にスイッチの一つになれば、と意を新たにする。

10/17 日常的な関わり～B教諭の思いに添う～

帰る前に教室に明かり。B教諭が明日の要請訪問前最後の仕上げに一人模擬授業をされていた。筆者は「明日の4時間目の体育、子どもたちと一生懸命運動して、いっぱい子ども褒めて、伝えて、6時間目の要請訪問の少しでも力になれるように体育の時間で子どもたちを温めとくわ」と伝えた。ここまで来たらこれぐらいしかできないなと思いつつながら、B教諭が、「ちょっと」と筆者を手招きするので教室に入ると、「明日の導入で使う子どもの映像なんですけど・・・」と言って筆者に意見を求めてきた。とてもいい動画(子どもたちのモデル動画)だったので、「OK!この動画で掴めたら明日ガッツポーズやね。」と返すと共に、動画を見せる前にしておくべきことを伝えた。B教諭がこうやって自分に意見を求めてきたこと、そして子どもの頑張る動画を見て「いいですよ!」と前向きに考え、私に伝えてくれたこと。B教諭が一人で抱えず、まわりに心を開けているんだなと成長を感じる。筆者にとってここ最近で一番嬉しい出来事だった。模擬授業でも多くの先生方に教えていただいていた。B教諭はいつも遠慮がちなイメージであったがこうやってコミュニケーションをとって

れ、若プロコーディネーターとして嬉しかった。

11/7 日常的な関わり～B教諭と子どもの姿～

補欠で1年生の授業に出ていると、隣の2年生教室から昼休みランチルームの表彰式の返事の練習が聞こえてきた。B教諭が子どもたちと練習しているようだ。1か月前に児童理解の会で今一度、全校でランチルームでの姿、返事を指導していくことを提案し、少しずつ子どもたちのよい姿が先生方にも子どもたちにも共有されているように感じていた。B教諭のように子どもたちとの中でよりよくなるように練習したり、声をかけあったりするプロセスを見ることができた。休み時間、「ちょっと聞こえてきたんやけど、いいね！B先生も子どもと一緒に取り組んでいるのが聞こえてきて！いいなって思ったよ。」と伝えた。表彰式の子どもの声はとても立派だった。

11/8 若プロ校内研修～自身を振り返る場～

5月に行った目指す学級の姿を聴き合う研修の2回目を行う。お互いが今学級や子どもについて考えたことを聴き合うこと、また5月の自分と比較し、よりよい子どもの姿を目指して考えることが目的だった。以下4名の若手教員の振り返りである。

(A教諭) 前に書いたことが概ね達成しているものもあれば、まだ意識していかなければならないものもあった。このように振り返る時間をとることで、今、目の前の児童にどのように接していくべきかがはっきりする。また、他の先生の考えていることや困っていることも知ることができた。共感することも多く、それについてどうすればよいか話し合うことができ、有意義な時間となった。

(B教諭) A先生の「子どもが楽しく授業を受ける姿」にとっても共感しました。行事が終わって少し落ち着いた時こそ授業が大切なんだと仰っていて、自分は授業規律のことを気にしていたので、まずは「楽しい授業」があってこそ、規律が生まれていくと思いました。

(C講師) 5月に比べて、来年なってほしい児童像が子どもの実態とそこからしてほしい成長に根ざしたものになり、自分の価値観の押しつけではなくなってきたかなと思いました。自分の学級だけの問題かなと思っていたもの(授業と休み時間のメリハリなど)も、他の学年でも共通していること

があったので、先生方に相談する機会ができてよかったです。今後も相談できる機会があればと思います。

(D講師) 授業や普段の生活から、メリハリが大切であると今回の話し合いで特に感じました。ずっと頑張り続けることは誰にとっても辛いことだからこそ、自由にできる時間・息抜きができる時間は学校生活において必要不可欠であると思いました。児童がする小さなことから少しずつ認め、褒めていくことが積み重なっていくことで、児童のやる気等についていくのではないかと思います。

若手4名のそれぞれの思いや気づきを見て、コーディネーターとしても一人一人に対してどのような形で働きかければよいのかを考えることができたように思う。B教諭は、同僚との関わりを通して今の自分に何が大切なのか気付いた振り返りが見られ、コーディネーターとしても嬉しく思う。

12/1 若プロ校内研修～自分自身を振り返る～

個別面談を行い、これまでの自分を振り返ってもらった。

Q 子どもたちの成長をどう振り返っている？

「子どもたち同士の関わりが少しずつよくなっていると思います。きつい言葉でなく、優しい関わりになってきていると感じます。」

Q B先生が意識されたことは？

「お互いを認め合うことです。できなくても私が待つことです。認め合う大切さを自分が思っていないと。子どもたちにも伝わらないと思って」

Q 学級経営等自分の成長をどう感じている？

「インプットが多くなっていたこれまでの2年間でした。今年は他の先生へのアウトプットが多くなっていると思います。」

Q C先生と自分自身との関わりやC先生のことをどう見ている？

「C先生が困ってますって聞きに来てくれる。自分も必要とされているんだなって思う。今はどうなのかな？」

Q B先生が子どもと関わる時に大事にされていることは？

「(うーんと考えて) 否定的にならずに、プラスに考えて、どんなことも一つ一つやることですかね。なかなか自己肯定感が低い子どもたち、認めることも大

切やし、指導する時も、あなたの行動はいけないけど頑張ってるねって伝えるようにしています。」

Q お互いに話をきて、筆者自身もたくさんB先生の言葉に元気もらっている。ありがとう。

「こちらこそ、これからもお願いします。話しやすいからです（笑）。」

(2) C講師と筆者、若手教員との関わり

9/26 日常的な関わり～若手の姿、筆者の葛藤～

C講師の要請訪問前日。いろんな先生からC講師の授業でご意見をいただく。結局、いろんな指摘があり、そのための教材準備が増えたり、授業の流れを確認したり、結局遅い時間になってしまった。コーディネーターとして、うまくC講師に対して見通しが持たせられなかったと反省。より良い授業になるのはいいのだが、授業には無限に手立ての方法があるので、授業者と子どもたちファーストのはずが、そうでなくなったのではと自分も心の中でもやもやした。結局自分にできるのは、一緒に考え、一緒に作ることだった。院での授業での省察を思い出す。「若手のやる気、やりがいを引き出す」ためのコーディネーターとしての手立てがそこには必要なだろうし、さらにコーディネーターとして考えていくポイントなのかもしれない。いずれにしてもC講師と子どもたちから先生方みんなが学ぶ機会になれば。駐車場までの道で「明日は導入で子どもが食いついたら、ゆさぶりでえっ？っていい反応したら、よし！！ってC先生も自分も楽しもうね！」と伝える。

9/27 日常的な関わり～C講師と同僚の笑顔～

C講師の要請訪問授業当日。研究テーマの「わくわく導入」については、子どもたちから「え～！」と拍手があがるくらい子どもたちの関心をつかんでいた。ゲストティーチャーあり、動画あり、本物の資料がたくさん授業だった。筆者は主に抽出児を見ていたが、たくさん考え、つぶやく姿があった。その姿はその子のこれまでの学び、C講師の手立てがそうさせたのだと思う。放課後の整理会では、C講師が「本当に、過去1（これ迄で一番の意）で子どもたちを引き込んだ導入でした！今までないです。いろいろありがとうございました」と笑顔で語った。教務の先生、A教諭、筆者、そしてC講師の4人で行った整理会だった。次のステップにつながるたくさん話のできた。今日の授業写真を4人で振り返ると、導

入場面のC講師の笑顔の写真があった。「この顔、いいね、楽しんでるね、やってやったぞ！っていい顔しとる」と伝えると、みんな笑顔に。授業者が楽しんでいると、子どもも楽しむ。本当にそうだと思う。これまでの教材研究のたまものだった。今後、若手教員である授業者が納得できる状況、授業者主体のものになるように関わればと思う。授業者の先生がどう感じたか、そしてこれからの教師人生でどうつなげていくか、結局のところC講師自身のことに関わるのだろう。だからこそ、C講師に振り返る時間をコーディネートするべきなのだと思う。

10/2 日常的な関わり～C講師の言葉から～

最近笑顔のC講師が「先生、火曜の先生の要請訪問で何かお手伝いすることはありますか？」と気遣ってくれた。相当ばたばたしていると見えたのかな（笑）「気持ちありがとう、明日少し当日の流れ確認で体育館で一人模擬するんやけど、A先生、C先生見てもらっていい？こんな姿目指して授業しますって思いだけ聞いてもらえる？明日」と返す。「わかりました。自分の時にはたくさんサポートしてもらったんで」と笑顔。C先生には子どもとの時間を充実したものにしてほしい。でも、その言葉が嬉しい一日だった。

11/8 若プロ校内研修～以前の自分と比べる～

目指す学級の姿を聴き合った研修でのC講師の振り返りでは、「5月に比べて、なってほしい児童像が子どもの実態とそこからしてほしい成長に根ざしたものに、自分の価値観の押しつけではなくなってきたかなと思いました。自分の学級だけの問題かなと思っていたもの（授業と休み時間のメリハリなど）も、他の学年でも共通していることがあったので、先生方に相談する機会ができてよかったです。今後も相談できる機会があればと思います。」と自身の変容について語る姿があった。この研修を通して自身を振り返り、自分の子どもへの関わりを変えたり、アップデートしたりしているC講師の姿が見られた。コーディネーターとしてC講師には少し自信をもってほしいと思う日になった。頑張っているって伝えなくなった。

12/2 若プロ校内研修～自分自身を振り返る～

個別面談を行い、これまでの自分を振り返っても

らった。

Q 子どもの成長をどう感じている？

「1学期は子ども同士のけんかが多かったです。でも校長先生やいろんな先生に子どもたちについて話をしてもらったこともあり、よくなってきたなって感じています。」

Q C先生自身の成長についてどう感じている？

「子どもたちが授業に集中してないなってすごく自分も困っていたんですが、授業で認め合いを大切にしたり、メリハリをつけた授業展開にしたりを心がけるようになりました。でも自分はアウトプットが結構苦手で、そこはまだです。」

Q でもC先生は、よく分からないことあったら質問していたよ！自分はいろいろ話してくれて嬉しかったよ。

「クラスの子どものことをよく話してくれてありがたかったです。自分が質問するのは、いつも教材研究のことばかりでしたが、先生が子どもの姿から語るってことを教えてくれて、今は子どもの姿をまず見て考えるようになりました。」

(3)第3期のまとめ

若手教員の個別面談では、それぞれの1学期に立てた目標に対して、振り返る言葉を聴くことができた。またB教諭は、自身の成長について語る場面もあり、コーディネーターとして振り返る機会を共に作れたことが有難かったし、自分の成長を振り返り、言語化することで自分の考えていることを整理できることをB教諭も筆者自身も実感できた。B教諭は日常的に様々な場面でコーディネーターの筆者や他の同僚に声をかける場面が見られたことが筆者も嬉しかった。若プロ校内研修では、若手同士で子どもへの思いを語り、関わり方の共通点や違う点を出し合う場もあった。B教諭が他の若手教員に関わり方を伝える場面があったが、B教諭のこれまでと比較しても第2期、第3期のB教諭が働きかけるという前向きな姿に成長の一つを見ることができたと思う。また、その成長変容を個別面談ではB教諭に伝えることができたと思う。コーディネーターとしてもB教諭のその姿が嬉しかったということも合わせて伝えた。

C講師は9月の要請訪問に向けて同僚の先生方、特にA教諭からの声かけもあり、素敵な授業をすることができた。だが、コーディネーターとして反省すべき点もあったのではと振り返る。授業日前日まで

いろいろ授業について言いすぎてC講師をバタバタさせてしまったのではないかとということである。C講師は大丈夫ですと言っていたが、本当は悩ませてしまったのではないかという思いが残っている。だが、授業後の整理会でのC講師の笑顔やC講師を囲む同僚達の前向きで楽しそうな雰囲気を感じ、筆者自身のモヤモヤは吹き飛んだことを今でも覚えている。コーディネーターとして考慮すべきことは色々あるのだろうけれど、より大事なことはC講師自身がそれまでの過程をどう受け止めて、自身で納得していくのかだと思う。コーディネーターがそのプロセスに寄り添うことに大きな意味があると思う。C講師は第2期の相互参観においても自身の困り感をアウトプットしてくれたが、C講師が子どもとの関わりで、また同僚との関わりの中で感じたことをどう整理していくかが大切なことだと思う。またC講師が目指す学級を語る研修の際に、「先生方に相談する機会ができてよかった。今後も相談できる機会があればと思う。」と自ら働きかけていこうとする言葉に成長を感じると同時に、コーディネーターとして研修の場を設定できたことを嬉しく思う。

そう考えると、コーディネーターの重要な役割とは、**若手教員が自分自身考えてきたことを振り返る場を作ること、日常的に若手が考えていることをつかみ、話したい、やってみたいと思えるように働きかけていくこと**にあると言えよう。

学級の目指す姿を語り合い、自身のこれまでを振り返る機会になった11月の若プロ校内研修の若手教員の振り返りも興味深いものだった。A教諭の「このように振り返る時間をとることで、今、目の前の児童にどのように接していくべきかがはっきりする」という言葉からは今後に生かそうとする姿勢が見える。D講師は「ずっと頑張り続けることは誰にとっても辛いことだからこそ、自由にできる時間・息抜きができる時間は学校生活において必要不可欠であると思った。児童がする小さなことから少しずつ認め、褒めていくことが積み重なっていくことで、児童のやる気等についていくのではないかと」と5月と比較して自分の児童への関わりを振り返る姿があった。若手の振り返りから、**日々の関わりと研修がやはり密接に関係しているのだ**と感じる期間であった。

若プロ校内研修、そして毎日の日常的な関わりを通して、筆者は若手教員の思いを聴くということに努めてきたが、それと同時に筆者自身の思いを聴い

てもらった場面も多くあった。その日々の関わりの中で、筆者自身が自分の教員生活を振り返り自身の教育観を再認識できたような感覚がある。例えば、コーディネーターとして若手の頑張る姿をキャッチし伝えること、学級担任として子どもたちの頑張る姿をキャッチし、声かけや学級だよりで伝えて来たことの重なりが感じられた。そしてどちらの場合も、相手に伝え、相手が次へのステップへと前向きになった姿を見た時に、筆者は「やりがい」を感じている。話し合う相手に対しての尊敬の気持ちをもつこと、そして素敵な部分を見つけ伝えていくことは筆者の教師観の一片であることを再認識した。

IV 考察

1. 若手の成長

「本研究の目的」の項で述べたように、本研究では「成長」を「よりよい子どもの姿を目指し、学級経営力や授業力向上等、個々の課題を解決すること」と定義した。

若プロ校内研修では、学級の子どもたちへの関わりや思いを聴き合うことからスタートして、相互参観ではお互いに考えを伝え合った。その後、若手同士、授業だけでなく日常的に関わっていかうとする姿勢が見られた。

1) A教諭は、昨年度の面談で、「校内で学ぶ研修がもっとあればよい。」と話していた。今年生徒指導主事、GIGA 担当であり、忙しい中であつたが、新しい取組内容の若プロの中で、多くのアウトプットをしてくれた。C 講師に対しては、「やっぱり授業力が一番」と伝え、C 講師のサポートをしようとする働きかけが何度もあつた。C 講師の要請訪問の検討会を重ねる中で「自分も（C 講師のように）そうだったな、よく悩んだのを思い出します。」と語り、「自分の大切にしているもの、やっぱり授業」と振り返っていたことが印象的である。A 教諭の働きかけにより、よりよい子どもの姿を目指して若手同士が聴き合う姿が生まれた。

2) B 教諭は、当初、学級経営のこと、認め合う学級を目指すと言っていた。一方 B 教諭自身、なかなかアウトプットが苦手であるという点も昨年度の面談から見えていたことだった。だが、12 月の個人面談だけでなく、第 1 期からの日常的な関わりの中でも、B 教諭が教材研究や学級の子どもたちへの関わり方で筆者や他の同僚に質問があ

ったり、若プロ研修では他の若手へアドバイスしたりする場面が本当に多く見られた。B 教諭がお互いに認め合う学級づくりについて考え、研修から学んだことは成長の一つであり、また 12 月の面談での「インプットが多くなっていたこれまでの 2 年間でした。今年は他の先生へのアウトプットが多くなっていると思います。」と答えていたことが B 教諭自身の前向きにアウトプットできるようになったことも成長の一片と言えるのではなかろうか。

3) C 講師は、いつも誠実に学ぶ姿勢があつた。日常的な関わりからもその姿を見ることができた。相互参観で、学級の子どもたちと自身の関係性についての困り感のアウトプットから、若手教員同士の繋がりがより強くなったのではとコーディネーターとして感じている。そして日々の関わりからお互いに感情交流したこと、さらに一生懸命に学ぼうとする C 講師の姿勢が繋がりを強固にしたのだろう。要請訪問の整理会での C 講師の笑顔、同僚の笑顔はまさに聴き合いがスタートであつた。第 2 期、「授業もそうだけど、学級づくりを学びたい」という C 講師の思いから若プロ校内研修をしたり、社会の教材研究では A 教諭に何度も尋ねたりすることがあつた。いつも学ぼうとする姿勢があつた。第 3 期に入り、C 講師は「授業で認め合いを大切にしたり、メリハリのある授業展開にしたりを心がけるようになりました。」と 4 月の自分を振り返り、また「先生方に相談する機会ができてよかったです。今後も相談できる機会があればと思います。」と語るようになった。

4) D 講師は、5 月、目指す学級を問われた際に、「どんな子どもの姿を目指すかと改めて言われると言葉にするのは難しいです。」と語っていた。D 講師は若手同士だけでなく、1 年を通して特支のコーディネーターの先生を中心に自分から聞きに行く姿が多かった。筆者とも体育を筆者が担当していることもあり、学級の子どものことで話すことが多々あつた。真摯に取り組む姿があつた。第 3 期の研修では、「ずっと頑張る続けることは誰にとっても辛いことだからこそ、自由にできる時間・息抜きができる時間は学校生活において必要不可欠であると思いました。児童がする小さなことから少しずつ認め、褒めていくことが積み重なっていくことで、児童のやる気等についていくのではないかと思います。」と 4 月と比較してより具体的に子どもの姿をイメージして手だてを考えようとする姿があつた。

これらのことより、「よりよい子どもの姿を目指す」という点で一定の成長があったと捉えることができる。また、先に述べたように若手教員に対して行った昨年度の個人面談資料をもとに今年度は2回の面談を行った。その際に若手教員が自身を振り返り、今の自分と以前の自分を比較しながら「学級経営力や授業向上についてもそれぞれ学ぶことがあった」「自身の成長があった」と述べている。課題の全てをクリアしたという訳ではないが、若手教員一人一人に成長が見られたとコーディネーターである筆者も感じている。また若手の成長をサポートするコーディネーターとしての一年で、若手の経験年数、パーソナリティーによって筆者自身の関わり方も違ってくると実感した。若手との研修、日常的な関わりから、時には共に考える、時には後方からサポートする、または若手からの言葉を待つなど様々な関わりを筆者自身考え、実践してきた。若手の成長の過程の中で、コーディネーターは、同じ関わりではなく、若手が何を思い、何を求めているのかをキャッチすることが大切なのだと考えるようになった。

最後に、11月の校内研修で「教師も子どもも、常に成長し続け、改善していくことが大切だなと感じました。」という振り返りが中堅教員からあった。まさに教師の成長があって子どもが成長していくのであり、子どもの成長があって、また教師も成長するのだろうなと感じた言葉であった。

2. 若プロコーディネーターの役割

若手の成長をサポートする若プロコーディネーターとしての役割について、本実践を通して明らかになった事柄を以下に記したい。

(1) 子どもの姿を中心に聴きあうこと

子どもの姿を中心に話し合うことで、お互いの子どもへの関わりや教師としての思いが見えてくる。関わりは多様であり、子ども理解に正解はない。ましてその関わりや思いは比較、優劣を決めるということが聴き合うスタートではない。子どものことを話していても、それぞれに背景があり、思いがある。その思いを互いに真摯に聴き合うことが土台となって、教師同士の関わりが太くなっていく。そのプロセスを通して、コーディネーターの自分に何ができるのかを考える。若手を分かろうとすることから始まる。

(2) 若手をつなぐきっかけとなる研修や日常的な関わり場の場を意識して設けること

相互授業交流と整理会から若手同士がお互いの学級を見合う意識、関わろうとする姿が生まれてくるのが分かった。相互に自ら考えを伝え合い、課題解決に向かうことは若手の成長の一つであると考えられる。そこでのコーディネーターの役割は共に考える立場であると同時に、若手同士をつなぐ立場でもあると考える。若手の学級のよい姿をタイムリーに伝えたり、校内研修をきっかけにして日常的に若手の思いを聴いたりすることを通して、若手同士をつなぐきっかけを作る。そのつながりが若手一人一人が自ら動く力の土台になる。

(3) 若手の姿や思いを管理職に伝えること

夏季休業中、管理職、教務に若プロ研修報告をしたが、お互いに若手のことで知らないことがあることが分かってきた。学級の見えない部分があるということだ。よって当然のことではあるが、やはりコーディネーターとして管理職や教務への若プロ研修報告を定期的に具体的に行うことも役割の一つである。若手に声をかけたり指導したりする先生はコーディネーターだけではなく、他にもたくさんいる。若プロは、若手をサポートの一つのきっかけにすぎない。それならば、若手をサポートする体制が少しでも重なり合うようにコーディネーターが働きかけることが、組織的に若手をサポートすることに繋がっていくと考える。

(4) 日常的な関わりの中での感情交流を続けること

若手との交流のスタートは相互理解であった。互いの思いを真摯に聴き合うことによって、安心感と感情交流という対人関係的土台ができる。

杉江・水谷(2017)は“教師ならば誰でももっている願いをまずは出し合える場がほしい”と述べている。聴き合う場と感情を交流できる関わりが大切なのである。今回の実践研究では、相互参観でのC講師の困り感のアウトプット、そして若手同士の関わりへと発展していった。第1期にお互いの思いを聴き合ったことがこのプロセスにつながったと考える。コーディネーターとしては、感情交流を通して若手が何を求めているのかをキャッチすることが大切である。

(5) 若手との距離感を考えて関わること

若手教員もそれぞれの経歴や個性が異なる。待つ、聴く姿勢で臨むことが必要な若手、一緒に教材研究

して共に考えることが必要な若手、時にははっきりとこちらから伝えることが必要になる若手など様々である。校内研修や日常的な関わりを通して、コーディネーターと若手との関わり距離感を4名から学ばせてもらった。

(6) 若手が自身を振り返る場を設定すること

本実践研究のため、若手教員との日常的な関わりや個人面談での記録を取った。記録があることにより、若手教員が自身を振り返る場を設定することでできた。ベテラン教員からも「自分の思い（めざすべき姿）を表出し、記録して比較したことを、継続することで、足りないこと（課題）や自分の取り組みでよかったこと（成果）が明らかになってくるのかもしれない。振り返る時間が必要だと感じた。」と言っていた。若手に限らず、記録の必要性を再認識した。

3. 若プロコーディネーターとしての一年

教員生活で初めて若プロコーディネーターとして学校組織の中で過ごした一年であった。聴くことを土台にした関わりからスタートし、若手の誠実な姿勢、関わるごとに分かってきた若手の熱い思いに日々、力をもらっていたと感謝の気持ちでいっぱいである。若プロコーディネーターとして、組織の中で、全教職員で子どもたちを見ること、そして若手教員をサポートしていくことの大切さと難しさを感じた一年でもあった。そのような中で、若プロ校内研修や日常的な関わりを通して感じたことがある。“教師である実践者は、自身の取組を自分自身で反芻し、良し悪しを判断しなくてはならない。そうして自分の実践を作っていく。その際の良し悪しの判断の根拠は自分の教育観であり、仲間から学ぶ教育観である”と杉江・水谷(2017)も述べているように、教職員一人一人の教育観に基づく子どもを見る視点や思いを日々共有しアップデートすることが必要ではないだろうか。多忙化といわれる現状ではあるが、教職員同士子どもへの関わりや思いをどこでどう重ねていくか、重ならないところを認め合っていくのがカギになる。今後も、子どもたちのよりよい姿を求めて、若手教員を含む同僚との感情交流を大切にしたい。

昨年度、高校野球で有名になられたある高校の監督が「優しさは想像力である」と話をされていた。日々、若プロコーディネーターとして若手と関わる中で一人ひとりが現状をどう捉え、どうしたいと考え

ているのかをつかむためには、相手の思いを想像する力をもっていたいと改めて思う。その力は聴くことを土台にした感情交流がポイントになると思う。

4. 今後に向けて

今後の課題として、日々の授業研究や校内研修の中に若手教員が「やってみよう」、「考えよう」と思えるような研修計画をさらに練り上げる必要がある。今年は、全教職員が若手の成長をサポートし、関わろうとしていることを改めて感じた一年であった。実践研究の研修にも快く参加して下さった。そのことを踏まえると、若手教員のみならず、様々な経験をされているベテラン教員と関わる場を若プロが主になって設定することも検討していく必要があると感じる。

引用文献・参考文献

- 1) 石川県教育委員会(2017)「石川県教育育成指標」
- 2) 石川県教育委員会(2019)「若手教員早期育成プログラムの概要」
- 3) 河村茂雄(2010)「日本の学級集団と学級経営」図書文化。
- 4) 榊原禎宏(2020)学校経営論と『教職の専門性』論のもつれをほぐす:『同僚性』論から『チーム教育』論へ、日本教育経営学会紀要、第62号。
- 5) 白松賢(2017)学級経営の教科書、東洋館出版。
- 6) 末松裕基・林寛平(2016)未来をつかむ学級経営学級のリアル・ロマン・キボウ、学文社。
- 7) 末松裕基(2017)これからの教育経営におけるリーダーシップ論(教師のための教育学シリーズ4教育経営論第7章)、学文社。
- 8) 杉江修治・水谷茂(2017)教師の協同を創る校内研修 チーム学校の核づくり、ナカニシヤ出版。
- 9) 杉江修治・石田裕久(2018)教師の協同を創るスクールリーダーシップ、ナカニシヤ出版。
- 10) 中村映子(2017)小学校若手教員の学級経営改善のためのアクションリサーチの意義と可能性、学級経営学論集第5号、37-50。
- 11) 蓮尾直美・安藤知子(2013)学級の社会学、ナカニシヤ出版。
- 12) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編 文部科学省